

群馬県立自然史博物館

県民に親しまれ

魅力ある博物館となるために

検討報告書

平成22年12月

魅力ある博物館を語る会

目 次

ページ

1	はじめに	2
2	「公共施設のあり方検討委員会」最終報告書	3
3	検討結果	4
	(1) 博物館の基本的な運営について	4
	(2) 博物館の展示（常設展・企画展）について	5
	(3) 博物館の教育普及事業について	6
	(4) 博物館の調査研究事業について	6
	(5) 博物館の入館料について	7
+	(6) 博物館の評価について	7
	(7) 入館者を増やす取組について	8
	(8) 博物館の広報について	9
	(9) 博物館の組織・職員について	10
	(10) 学校をめぐる状況について	10
	(11) まとめ	12
4	添付資料	
	(1) 開館から現在までの実績データ集	
	(2) 全国の自然史関係博物館設置状況	
	(3) 都道府県立自然史系単独博物館一覧表	
5	会議開催状況	14
6	委員名簿	14

1 はじめに

群馬県では、県の財政状況が一段と厳しい中、公共施設のあり方を抜本的に見直す観点から、「群馬県公共施設のあり方検討委員会」（以下「あり方委員会」という）を設置（H20.3）し、群馬県立自然史博物館（以下、「博物館」という）を含む15施設を対象に検討を行い、平成21年10月には最終報告書の提出を受けた。

この報告書を受け、県（文化振興課）では所管する施設を対象に「県民の意見を聞く会」を設置することになり、博物館においては「魅力ある博物館を語る会」（以下「語る会」という）が設置（H22.7）された。

語る会では、これまで4回の会議を開催し検討を行ってきた。

第1回会議では、博物館の設置に至る経緯や課題、施設の概要について説明があり、館内視察を行った後、フリートークによる議論を行った。

第2回会議では、博物館のこれまでの14年間の実績とデーターについて事務局から説明があり、また、現下の博物館をめぐる厳しい状況も考慮して、議論の「今後の方向性等について」提案があり、それをもとに現実的で実現可能なテーマに絞って検討を行った。

第3回会議で更に議論を深め、最終回の会議では、事務局から他の都道府県立自然史系博物館との比較について説明があり、全国的に見た本県の博物館の位置づけや評価についても議論を行った。

その結果、博物館が抱える課題が明らかになるとともに、これまでの会議で各委員さんから示唆の富んだ多くの有益な意見をいただくこともできた。

総合的な評価としては、展示内容は教育施設として非常に素晴らしく、国内屈指の内容で、教育普及事業や調査研究事業、資料収集・保存も職員の努力により、よく取り組まれているという意見が多かったが、残念ながらこの博物館の魅力が地元はもとより、多くの県民に理解されているとは言い難く、広く周知させる努力が必要であるということ、委員の意見も一致した。

県の財政に余裕がなく、職員・スタッフの体制も十分でない中、今後の運営は厳しいものがあるが、単に運営経費や入館者数で評価するのではなく、展示内容、各種事業の教育的効果、資料収集・保存の重要性、全国的に見たこの施設の位置づけなどを考慮した上で、県民から適正な評価を得ることがより大切であるとの結論も得られた。

ここに、意見を取りまとめて報告書を提出するが、本報告書が有効に活用され、今後の博物館運営のみならず、県の文化行政や教育行政推進の一助になれば大変幸いである。

平成22年12月
「魅力ある博物館を語る会」 座長 里見 哲夫

2 「公共施設のあり方検討委員会」最終報告書

「あり方委員会」において審議され、最終報告書に記載された博物館の検討結果の概要は次のとおりであり、語る会ではこれを踏まえた上で検討を行った。

(1) 施設の必要性について

博物館は、本県の自然系学術文化に係る研究・社会教育の中心施設として、多くの県民に利用されており、今後も継続とすべき施設である。また、展示内容も充実しており、教育普及や調査研究にも実績を上げており、観光面からも本県を代表する施設になり得ると考える。

(2) 管理運営方法について

①教育施設としてだけでなく、観光施設としても明確に位置づけ、積極的なPR等を行い、県内外における集客の新たな展開を図るべきである。

②学校利用促進のため、県教育委員会と連携するとともに、研究部門職員の学校現場への出張授業の拡大や、学校側のニーズを取り入れた運営等を更に推進すべきである

③調査研究の成果について、県民に対してより一層の情報発信に努めるとともに、大学等との連携について検討されたい。

(3) 管理運営主体について

①富岡市内の総合公園内に位置し、園内には市の複数施設も設置されているが、園内で利用者側に立った一体的・総合的サービスが提供できるよう、施設相互の連携等について、市とよく話し合いをする必要がある。

②県直営による管理が適当と考えるが、民間のノウハウを活用する観点から、指定管理者制度について、他県での導入、活用状況など、情報収集に努められたい。

3 検討結果

(1) 博物館の基本的な運営について

(提言)

博物館として、基本的な役割、存在意義、長期計画などを明らかにした運営方針がないので、きちんとこれを策定し、その方針を堅持した上で、観光や環境教育への対応など時代に応じた社会的ニーズ・県民ニーズに応えていくべきである。

<p>委員の 意見・ 提案</p>	<p>①博物館の使命として、子ども達が機会均等に自然科学の情報が得られるこうした施設が地方にあることが重要であり、博物館が50年、100年先も続くような方策を検討すべきである。</p> <p>②館内展示だけではなく、自然の現場とのリンクが重要であり、昔にくらべて自然環境が大きく変わってきている中で、子ども達がこうした現場で自然を学ぶことに力を入れていくべきではないか。</p> <p>③利用者数の増加や利用率の向上が迫られているが、主体性を持った事業展開を図ることが重要であり、あまり幅を広げず選択と集中により、施設の存在意義を明確にしたほうがよい。</p> <p>④自然史では職員の方もかなり積極的に取り組んでいるが、自然史のPR、ウリをどう展開していくのか、学芸員等の職員がテーマを持って取り組み、それを館の運営にどう活かすかが課題であり、少子化の時代で子どもは減る中で、施設の基本構想をしっかりとすべきではないか。</p> <p>⑤本来なら施設を設置した時に、10年後、20年後を見込んだ長期的な運営計画を策定しておくべきではなかったか。</p> <p>⑥魅力ある博物館にするためには、資料や標本の充実が必要不可欠であるが、現状では収蔵庫が満杯状態で、資料収集・保存という基本的な役割を果たすことも難しくなっており、早急に収蔵庫の増設を図る必要がある。</p> <p>⑦社会において人命に関わる病院がなくてはならない施設であるのと同様に、この博物館も子ども達への教育施設、社会教育施設、文化施設として、非常に大切に重要な施設であるという事を強く訴えていくことが必要である。</p> <p>⑧今後、この提言を具体化していくために、男女を問わず多様な人材による実践的なワーキンググループを設置して検討するよう要望したい。</p>
<p>博物館 としての 対応</p>	<p>博物館が設置された当時は、基本構想や長期計画が十分議論されずにスタートしてしまい、また、県の方針で運営協議会等も設置されず、そうした構想や計画も議論をする場がなかった。</p> <p>今後、文化振興課とも協議のうえ、基本的な運営方針や長期計画、施設整備等について、議論できる場を確保した上で、策定について検討していきたいと考えている。(喫緊の課題)</p>

(2) 博物館の展示（常設展・企画展）について

(提言)

常設展については、一部最新の情報を提供できていない展示もあり、経費をかけた限り大規模な更新は無理であるが、「ぐんまの自然」の展示をはじめとして、この博物館として目指すものを明確にした展示の仕方や、他県の自然と比較出来る展示の仕方などもっと工夫の余地がある。

視覚障害者等へも工夫した展示や、名誉館長や学芸員による展示解説会、解説員による身近で気軽なガイド案内など、温かみのある博物館として入館者サービス向上に努力する必要がある。

また、「本物を見せる博物館」として、来館者にこの館の特徴をよく理解してもらうために、名誉館長のメッセージを作成して来館時に配布するとよい。

<p>委員の 意見・ 提案</p>	<p>①目の不自由な子ども達は展示物を見ることができないが、見えなくてもここに来ることによって何か得るものがある、そんな魅力的な博物館であってほしい。</p> <p>②常設展の「ぐんまの自然」は、単に自分の県の特徴を並べるだけではなく、県外の人達にも興味を持ってもらえるよう、もっと広い視野で、他県との比較の物差しが入った展示にすべきである。また、その他の常設展についても、しっかりした構成になっているか、もう1回考え直す必要がある。</p> <p>③企画展は、昆虫、化石、恐竜等一般の関心が高いテーマに比較的入館者が多い。</p> <p>④動植物の絶滅危惧種（レッドデータ）の展示なども必要であるが、館にはこれ以上展示場所がないし、標本によっては採集場所も表示できないという問題もある。</p> <p>⑤ただ展示するのではなく、体験ができたり、近くで解説員に解説してもらったり、職員の苦労話などがあると温かみのある博物館になる。</p> <p>⑥大人向けに、学芸員による解説見学会（学会等の話題ももりこみながら）を定期的・コーナー別に行ったらどうか。</p> <p>⑦この博物館の目指すものとして、できる限り「本物を見せる博物館」にしたいという名誉館長の思いがあるが、その思いを1枚のメッセージにして来館者に配れば、より博物館を理解できるので是非配布してほしい。</p>
<p>博物館としての 対応</p>	<p>常設展では、広く一般向け・子ども向けの展示を行っており、もっと専門的な情報を知りたいという人達のために、企画展やバックヤードツアー（収蔵庫等見学）を行っている。</p> <p>常設展の大規模な更新については長期的課題であり、予算との関係もあり県と協議を要するが、指摘のあった展示方法の工夫の余地については、外部の方々の意見を聞きながら改善を図っていきたいと考えている。(短期的課題)</p> <p>視覚障害者への対応は、視覚障害者団体の受入や移動博物館を視覚障害者向けに実施した実績もあり、今後の課題として取り組んでいくこととしたい。(短期的課題)</p> <p>また、名誉館長や学芸員の講演や解説会は、これまでも度々行っているが、入館者の目線に応じたガイド等のサービス向上は、県民に親しまれる博物館としても非常に大切なことであるので、本来の業務に支障のない範囲で取り組んでいきたいと考えている。(短期的課題)</p>

(3) 博物館の教育普及事業について

(提言)

様々な教育普及事業を幅広く実施しているが、自然保護や環境問題等一般の関心が高い問題についても、もっと積極的に取り組んで、社会的な関心を引き起こすきっかけづくりを博物館が行うべきであり、また、博物館をもっと知りたいという人達のために事業の充実を図るべきである。

委員の意見・提案	①博物館が中心となって、群馬県内の自然環境の保護・保全活動を推進していくべきである。 ②博物館をもっと知りたいという人達のために、バックヤードツアーを定期的に行ったらどうか。 ③県教育委員会とも協議して、教育普及事業や調査研究事業の充実・拡大を図るべきである。
博物館としての対応	教育普及事業の目的は、事業を通して、多くの人達に自然の大切さや自然史に関心を持ってもらうことであり、普及方法についても、子ども達や学校教育関係者、一般の方々等、対象に応じて多種多様な事業を行っている。 自然環境の保護や保全活動の重要性を訴えることもその目的の一つと考えており、これまでも、県内の自然保護団体とは連携を図り事業を行ってきたが、社会的なニーズも踏まえて、博物館として今後どのような事に取り組むことができるかを検討していきたいと考えている。(中長期的課題)

(4) 博物館の調査研究事業について

(提言)

学芸員等がどのような調査研究を行っているのか、一般の人にはわからない面があり、せっかくの研究成果が活かされていないことから、学芸員等がもっと表に出て、研究成果の報告・PRなどに努める必要がある。

委員の意見・提案	①自然環境を良くするという視点から、市民を巻き込んだ調査研究をすると、人々の関心も高まり、施設が活性化するのではないか。(琵琶湖博物館は琵琶湖の環境浄化で成果を上げている) ②学芸員の研究成果が、館全体にフィードバックされる必要がある。 ③資料の収集・保存という仕事の重要性をもっと広報する必要がある。 ④自然に関して、子ども達や一般の人が分からないことがあった場合、最後に頼りになるのはこの博物館であり、そうした面でも教育的、社会的に役立っている事をPRすべきである。
----------	--

<p>博物館としての対応</p>	<p>学芸係9名という体制で、常設展示、企画展示、調査研究・論文作成以外に学校現場での講演や解説、更には資料の収集・登録・保存という業務を行っている。資料の登録件数は全部で約12万点にもものぼっており、その中には既に絶滅した貴重な動植物もある。</p> <p>こうした資料収集などの地味な仕事はほとんど評価されないが、展示内容の充実や博物館の質の向上にもつながる大事な仕事であり、今後はこうした業務を理解して評価してもらえるよう、学芸員業務のPRを積極的に行っていきたいと考えている。(短期的課題)</p>
------------------	---

(5) 博物館の入館料について

(提言)

入館料については、県の方針で中学生以下無料となっているが、全国的な状況や受益者負担の原則から有料化について検討の余地はあると思われるし、有料の入館者を増やす方策を検討すべきである。

<p>委員の意見・提案</p>	<p>①有料の入館者数を増やすことを考えるべきである。</p> <p>②県立施設が中学生以下は無料というのは解せないし、受益者負担の原則から一定額の負担はすべきである。</p>
<p>博物館としての対応</p>	<p>入館料は、博物館法で公立博物館は原則無料となっており、美術館等他の県立施設も横並びで中学生以下は無料となっている。</p> <p>県全体の政策に関わることでもあり、今後の検討課題としたい。(中長期的課題)</p>

(6) 博物館の評価について

(提言)

入館者数、事業内容、運営費、職員体制等は、費用対効果の面から見ても、相当努力していると高く評価できるが、外部評価委員会やモニター制度の設置等、客観的に評価するシステムを導入するべきである。

また、入館者数だけでなく、入館者の満足度、調査研究の内容、資料収集・保存の実績など、様々な評価基準を設けて総合的な評価を行うべきである。

<p>委員の 意見・ 提案</p>	<p>①客観的に見ても、ここの博物館の入館者数は他の施設に比べて良い。 ②資源と交通の便は良いし、県内のニーズを確保したうえで、県外の方に評価されることも大切である。 ③現状では、これ以上リピーターを増やすことには厳しいものがあり、金をかけないと入館者は増えない。 ④県人口が200万人を考えれば入館者数には限界があり、年間16万人は相当努力をしている。 ⑤入館者数を評価してもらえような解釈の仕方も考える必要がある。 ⑥入館者数だけで評価するのではなく、様々な評価基準（来館者の満足度調査等）を設けて、館の状況を示していく必要がある。 ⑦外部評価委員会を設けて、本県に適した規模かどうか、事業内容・費用対効果等についてきちんと評価してもらい必要がある。 ⑧モニター制度を設けて評価してもらったらどうか。 ⑨赤字であっても、未来の子ども達を育てる投資であり、県民が満足している施設なら、理解が得られるのではないか。 ⑩今後、具体的な運営改善につながるよう、外部評価委員会を早急に設置して、この会が出した検討結果等については是非外部評価を行っていただきたい。 ⑪外部から寄せられるいろいろな意見や評価に対して、博物館がどう対応したかを、館内に掲示するなどして公表してもらえると、意見や評価する側もやり甲斐がある。</p>
<p>博物館と しての 対応</p>	<p>県立施設の中でも入館者数が多い点を評価してくれる方は多いが、調査研究や資料の収集保存に職員が努力している点を評価してくれる方は多くない。 外部評価委員会の設置については、必要性を感じており、来年度に評価項目・評価基準等の検討を博物館内部で進めるとともに、文化振興課とも協議の上、できるだけ早く設置したいと考えている。(短期的課題)</p>

(7) 入館者を増やす取組について

(提言)

- ①あり方委員会でも提言されたとおり、教育施設としてだけではなく観光施設としても十分な魅力を持った施設であり、博物館単独ではなく、地元の富岡製糸場やサファリパークとも連携して、ツアーの誘致など積極的な観光対応を行うべきである。
- ②学校団体関係では、県内の先生方にこの施設に来てもらう機会を設けて利用校を増やす、他県の教育委員会に働きかけて利用校を増やす、交通のアクセスが良いのに利用が少ない長野県の学校利用を増やすなどの取組を行うべきである。
- ③学校以外にも、社会福祉施設などの団体が視察しても十分楽しめる施設であり、そうした団体への働きかけも必要である。
- ④「自然の森づくり」運動など、自然に関する社会的関心の高いテーマについて、地域住民を巻き込んで、活動のきっかけづくりを博物館が行うべきである。
- ⑤他の博物館と連携して、交流協定の締結や企画展のやりとりなども行くと、県内では見られない展示を行うことができ入館者の増加につながる。
- ⑥館長や学芸員による解説も人気があるので、定期的に行ったほうがよい。

委員の 意見・ 提案	<p>①認知症の人など社会福祉施設の入所者にこうした県立施設を見せたら、子ども時代にかえられて良いと思うし、県内の社会福祉施設の視察コースにも十分耐えられるので、そうした施設への働きかけも必要ではないか。</p> <p>②来年、デスティネーション・キャンペーンが本番であるが、知識の「知」を組み合わせた観光に人々が興味を示してくるので、富岡製糸場を含めた地域の財産と組み合わせた観光の仕掛け作りを行えば、博物館も十分活きるのではないか。</p> <p>③近隣施設の中には生きた動物を見られる民間のサファリパークがあるが、こうした民間施設との連携なども考えるべきで、閉じた中では限界があり、博物館を活かす方向に発想を変えていく必要がある。</p> <p>④博物館単独ではなく、どこか他の施設と連携して、観光客の増加に取り組んだらどうか。また、解説員やボランティア、地域の人達の参加も得て、ガイドの確保等、単に見せるだけではなく、お客を満足させる態勢づくりも必要である。</p> <p>⑤観光エージェント等観光関係者にツアー誘致などの働きかけを行ったらどうか。</p> <p>⑥他県の教育委員会に働きかけて他県の学校団体の利用を増やしたらどうか。特に、交通アクセスが良いのに、利用が少ない長野県の学校団体を重点に増やすべきである。</p> <p>⑦「植林ではなく自然の森をつくろう」という運動を展開している宮脇昭先生を講師に迎えて、地元を巻き込み「自然の森づくり」に取り組むことを行ったらどうか。</p> <p>⑧他の博物館と連携して、一般的な貸し借り以外にも、交流協定の締結や企画展のやりとりなどを行ったらどうか。(沖縄県博物館と連携して、群馬の人達に沖縄の海を見せるのもよい。)</p> <p>⑨小中学校の先生には理科に疎い人も多く、この博物館に来たこともない人が結構いるので、先生が集まる機会を利用して、ここに来てもらって実際に見てもらい、すそ野を広げていく必要がある。</p> <p>⑩最初から観光的な視野でもって入館者増に取り組むのではなく、教育的な面から入って観光面にも拡大していく、オーソドックスなやり方が長続きするのではないか。</p> <p>⑪館長や学芸員による中身の濃い解説・ガイドがあると人が集まるので定期的にあるとよい。</p>
------------------	--

博物館としての対応	<p>来年度、群馬県でデステネーションキャンペーンが開催される関係で、観光面への対応についても館全体として取り組んでおり、今年は千葉県観光エージェンツと協力して、「赤とんぼツアー」を受け入れている。</p> <p>地元観光施設との連携については、館内のショップをサファリパークの会社をお願いしているが、共通パスポートの発行等全面的な連携については、県の条例改正等環境整備が必要であり、今後、他県の事例を調査したり、他の県立施設とも連携して実現に向けて努力したいと考えている。(短期的課題)</p> <p>学校団体関係や社会福祉団体関係への働きかけについては、機会をとらえて積極的に対応したいと考えている。(短期的課題)</p> <p>地域を巻き込んだ社会的な取り組みや、他の博物館との連携については、現在の職員体制では厳しい面があり、今後の検討課題としたい。(中長期的課題)</p> <p>館長や学芸員の解説会については、既に実施しているが、本来業務に支障の出ない範囲での対応は可能である。(短期的課題)</p>
-----------	--

(8) 博物館の広報について

<p>(提言)</p> <p>自然史博物館と言ってもどのような施設なのかわかりにくく、自然史に関心のない人も多いので、新聞、県・市町村広報紙、JR等の旅行誌などへの掲載依頼を博物館の方から積極的に行うべきである。</p> <p>また、博物館をわかりやすく説明したもので、自分の地域の自然を知る事によって、郷土のアイデンティティ形成につながるようなガイドブックがあるとよい。</p>
--

委員の意見・提案	<p>①一般の人には自然史とは何かわかりづらいし、関心のない人もいるので、そうした人へのPRが必要である。</p> <p>②自然や標本をわかりやすく説明し、学芸員の紹介などもある郷土のアイデンティティ形成につながるようなハンディガイドブックがあるとよい。</p> <p>③特に夏休み等の長期休暇期間中は、遠隔地の家族や子ども達向けに、来館のPRを積極的に行う必要がある。</p> <p>④新聞、県・市町村の広報紙、JR等の旅行誌などへ掲載してもらえるよう、博物館の方から積極的に掲載依頼の働きかけを行う必要がある。</p>
博物館としての対応	<p>博物館の広報については、新聞への掲載をはじめ、テレビ、ラジオ、ホームページ、広報紙など、あらゆる広報媒体を用いてPRに努めているが、今後はこちらからの積極的な売り込みも行っていくこととしたい。</p> <p>ガイドブックについては、以前作成したこともあるが、予算等の状況を見ながら作成を検討することとしたい。(短期的課題)</p>

(9) 博物館の組織・職員について

(提言)

現在の職員体制では、新しい事業構想に取り組むには無理があり、構想を具現化できる人材を外から入れて、組織の活性化を図るべきである。

また、人事異動で配属される教職員に対し、処遇面の改善を図る必要がある。

委員の意見・提案	<p>①今の職員構成では限界があり、教育普及を学校の先生に任せるのではなく、新しい構想を具現化できる人材を外から入れて、組織の活性化を図るべきである。</p> <p>②博物館の教職員は、学校の教職員に比べ、人事や給与等の処遇面で不利な扱いを受けており、処遇の改善を図る必要がある。</p>
博物館としての対応	<p>施設発足当初と比べ、学芸員の確保によりある程度の職員体制は整ったが、更に学芸員を増やし学芸業務の質的向上を図る必要がある。新たな人材の確保や教職員の処遇面の向上については、県として対応すべき課題であり、主管課に提言を伝えることとしたい。</p>

(10) 学校をめぐる状況について

(提言)

今の学校は、部活動等で先生には余裕がなく、理科専門の教職員やフィールドワークできる教職員も少なくなっているなど、博物館を利用できる環境にないので、博物館の方から積極的に働きかけて利用を促す必要がある。

委員の意見・提案	<p>①今の小中学校でフィールドワークをできる先生は、皆50代以上であり、若い先生方はフィールドワークができなくなっている。また、教員養成の大学教育においても、フィールドワークできる学生が少なくなっている。</p> <p>②学校の教員は、土日は部活動等で忙しく、教育現場でも余裕はなく、何かやりたくても何もできない状況である。</p> <p>③今の学校は、博物館に来たくても来られる状況ではなく、学校側に期待することはできないので、やるなら博物館の方から積極的に動いて利用を促す必要がある。</p> <p>④県教育委員会の「学校教育の指針」の中に、「理科教育で博物館を利用すること」という文言があったが、4～5年前になくなった経緯があるので、是非それを元に戻すよう県教委に依頼する必要がある。</p>
博物館としての対応	<p>学校団体の利用は県外が6割で、県内は4割と少ないが、県教育委員会サイドで尾瀬や昆虫の森へ行く事を奨励していることや、地元や県内は近すぎて利用しづらいということもあり、県内の利用率は低くなっている。</p> <p>学校も教職員も非常に忙しく余裕のないのは確かであるが、なるべく先生方に博物館に来てもらって、館内授業や貸出資料を活用した授業の実施等を通して、県内の学校団体の利用率向上を図っていきたいと考えている。(短期的課題)</p>

(11) まとめ

理科に対し児童・生徒の興味・関心が低くなったり、自然や科学に対する基礎的な知識を持たない人が増えたり、いわゆる「理科離れ」が社会的問題となって久しい。

また、学校の理科教育においても、高校で地学の講座がなくなってきたり、理科が苦手な先生が増えたりしており、自然観察・フィールドワークできる若い先生も少なくなっている。

こうした理科離れの要因として、子ども達が自然に触れる機会が減少していることや小中学校の教師が文系学部の出身者が中心になってしまったことが指摘されているが、学校教育への支援や自然に関する様々な事象への関心を高める施設として、この博物館の果たすべき役割、存在意義は益々重要となってきているとすることができる。

一方、自然史博物館が本県に存在する意義はどこにあるのか。

群馬県は、谷川岳等急峻な山々から、浅間山、尾瀬湿原、赤城・榛名・妙義の上毛三山、利根川をはじめとする河川、湖沼、里山、平野部に広がる水田・畑など、実に多様で豊かな自然に恵まれており、海がない点を除けば、全国屈指の自然が豊かな県と言える。

その群馬県に自然史博物館が設置されているという事は、非常に意義のあることであり、県民として大きな誇りに思っており、よい施設である。

全国的に見ても、都道府県立の自然史系単独博物館は9館しかなく、その中でも展示内容はトップクラスと言っても過言ではないと思われる。

また、この博物館の特徴として、動く恐竜や巨大な恐竜の骨格標本の展示、できる限り本物の標本展示に努めていること、触れる展示品の多さ、ガラスケースではなく直に見られる展示品の多さなど、他館にない独自の特色を持って展示している点も高く評価できる。

県内はもとより、首都圏から多くの学校団体が博物館を利用しており、そこで興味を示した子ども達が家族を連れてまた来館するというケースが多く、教育的価値の高い施設でもある。

しかしながら、これまでの博物館運営については、より魅力ある博物館に向けて、きちんと運営改善がなされているかどうか、また、この博物館の価値や魅力を県民や多くの人達に周知させる努力が十分であったかどうかという点では、残念ながら不十分であったと言わざるを得ない。

「魅力ある博物館」とはどういう博物館なのか。それは、この「語る会」の中で出された多種多様な多くの意見が示している。

博物館と触れ合う人々は様々であり、年齢や知的好奇心のレベル、活動意欲など博物館に期待する魅力もまた様々である。

例えば、来館して展示を観て満足する人から、博物館とともに調査研究をすることに満足する人まで、別の観点では、観光施設としての魅力を感じる人から、学校教育を補完し発展させる施設としての魅力を感じる人まで様々である。

そして、これらの魅力を創り伝えているのは「博物館の人」である。資料収集・調査研究・企画展・学校連携など広範な仕事を行う学芸員、教育普及活動・広報・学校連携などを行う教育普及職員、展示の解説を行う解説員、来館者のお世話をする案内員など多くの「博物館の人」がいて博物館の魅力を創っている。

「魅力ある博物館」とは、魅力ある展示に加え、魅力ある「博物館の人」と触れ合える場所である。そして、多くの県民にその魅力を伝え、群馬になくってはならないと感じていただける施設にならなければならない。

そのためには、職員の意識改革と自己研鑽、博物館組織の運営改革が必要であり、今後、具体的に次のような事に取り組んでいく必要があると考える。

①運営協議会を設置して博物館の基本運営方針（長期的計画、収蔵庫等施設整備計画等を含む）を策定する。

- ②評価委員会を設置して外部からの評価を受けて運営改善に取り組む。
- ③博物館の目的や事業を積極的に広報するとともに、自然に関する社会的なニーズに応じて博物館から情報発信を行っていく。
- ④県や市町村教育委員会と連携し、学校教育への支援を行うとともに、社会教育施設、文化施設、観光施設としての役割に応じていく。
- ⑤地域の観光施設・文化施設との連携、地元市町村との連携、県外博物館との交流や事業連携等、関係機関や関係施設との連携を強化する。

最後に、本報告書が実効性を持った報告書となるためには、設置が望まれる「評価委員会」において、今回の検討結果の検証が必要であり、提言だけで終わることのないよう要望してまとめの言葉としたい。

4 添付資料

- (1) 開館から現在までの実績データ集
- (2) 全国の自然史関係博物館設置状況
- (3) 都道府県立自然史系単独博物館一覧表

5 会議開催状況

区 分	日 時	場 所
第 1 回	平成 22 年 8 月 6 日(金)	自然史博物館中会議室
第 2 回	平成 22 年 9 月 30 日(木)	自然史博物館中会議室
第 3 回	平成 22 年 11 月 9 日(木)	自然史博物館中会議室
第 4 回	平成 22 年 12 月 21 日(火)	自然史博物館中会議室

6 委員名簿 (H22.8.6 ~ H22.12.28)

区 分	職 業 等	氏 名
地域活動者	群馬県自然環境調査研究会顧問	里 見 哲 夫 (座長)
専門家	群馬大学教育学部長	小 池 啓 一
教育関係者	松井田南中学校長	池 内 君 雄
観光関係者	前 (財) 群馬県観光国際協会専務理事	寺 澤 <small>みちゆき</small> 康 行
広報関係者	上毛新聞社文化生活部長	田 中 幸 彦
公募	白鷗大学教育学部非常勤講師	簗 輪 <small>よしふさ</small> 欣 房
公募	博物館ボランティア	角 田 寛 子
市町村	安中市産業部長	駒 井 悟
市町村教育委員会	富岡市教育委員会前教育部長 富岡市教育委員会教育部長	横 尾 繁 雄 (H22.8.6 ~ H22.9.30) 須 藤 良 夫 (H22.10.1 ~ H22.12.28)
合 計	定数 9 名	